

春泥發句集

柳維駒父の遺稿を編集して余に序を乞。序して曰。「余曾テ春泥舍召波に洛西の別業に會す。兼すなはち余に俳諧を問。答曰。俳諧は俗語を用て俗を離るゝを尙ぶ。俗を離れて俗を用ゆ。離俗ノ法最かたし。かの何がしの禪師が、隻手の聲を聞ケといふもの、則俳諧禪にして離俗ノ則也。幾頓悟す。却問。叟が示すところの離俗の説、其旨玄なりといへども、なを是工案をこらして我よりしてもとむるものに

柳維駒 父ももつと俗を離るゝと云ふを乞
答曰「余曾テ春泥舍召波に洛西の別業に會す波すを余に俳諧を問る
曰俳諧ハ俗語を用て俗を離るゝを尙ぶ俗を
離れて俗を用ゆ離俗法最うに何れ
禪は隻手此聲を聞ケといふもの則俳諧禪
して離俗則に波頓悟す却問叟が示すところ
の離俗の説其旨玄なりといへどもなを是工案
をこらして我よりしてもとむるものにあら

あらずや。しかじ彼も
しらず、我もしらず、
自然に化して俗を離る
るの捷徑ありや。答曰。
あり。詩を語るべし。
子もとより詩を能す。
他にもとむべからず。
疑敢問。夫詩と俳諧
といさゝか其致を異に
す。さるを俳諧をすて
て詩を語れと云。迂遠
なるにあらずや。答曰。
畫家去俗論あり。曰。
畫去俗無二他法。多
讀レ書則書卷之氣上升、
市俗之氣下降矣。學者
其慎旃哉。それ畫の俗
を去だも筆を投じて書

き、彼もさう我もさう自然に化し、
俗を離るる捷徑ありや。答曰。詩を語れ。
子もとより詩を能す。他にもとむべからず。
敢問。夫詩と俳諧とさう其致を異にするを
俳諧をさう詩を語れと迂遠なるにあらずや。
答曰。畫家去俗論あり。曰。畫去俗無二他法。多
讀レ書則書卷之氣上升、市俗之氣下降矣。學者
其慎旃哉。それ畫の俗を去だも筆を投じて書

を讀しむ。況詩と俳諧と何の遠しとする事あらんや。差すなはち悟す。或日又問。いにしゑより俳諧の數家各々門戸を分ち、風調を異にす。■いづれの門よりして歟其堂奥をうかゞはんや。答曰。俳諧に門戸なし只是俳諧門といふを以テ門とす。又是畫論曰。諸名家不分門立戸、門戸自在其中。俳諧又かくのごとし。諸流を盡してこれを一囊中に貯へ、みづから其よきものを撰び、ひ用に隨て出す。唯自

あらんやゆすもて悟す或日又問、何をよみ俳諧の名家各門戸を分ち風調を異にするをいづれの門よりして歟其堂奥をうかゞはんや又見畫論曰諸名家不分門立戸自在其中此又さうのごとく諸流を盡してこれを一囊中に貯へみづから其よきものを撰びひ用に隨て出す唯自己胸中にと観る外他の法をきんも常に其友を撰て

己ノ胸中いかんと顧るの外他の法なし。しかれども常に其友を撰て其人に交るにあらざれば、其郷に至ることかたし。渡問。其友とするものは誰ッや。答其角を尋ね、嵐雪を訪ひ、素堂を倡ひ、鬼貫に伴ふ。日々此四老に會してはつかに市城名利の域を離れ、林園に遊び、山水にうたげし、酒を酌て談笑し、句を得ることは専ら不用意を貴ぶ。如此する事日々。或日又四老に會す。幽賞雅懷はじめのごとし。

其人に交るにあらずんばや郷に至るを得じ
 渡問其友とするものハ誰ヤ答其角を尋ね
 嵐雪を訪ひ素堂を倡ひ鬼貫に伴ふ日々
 此四老に會ひてはつかに市城名利の域を離れ
 林園に遊び山水にうたげし酒を酌て談笑
 句を得ることは専ら不用意を貴ふ如此
 する事日々或日又四老に會し幽賞雅懷
 けるものなり眼を閉て苦吟し句を得て
 眼を開く忽ちその所を失ふことすべし

眼を閉て苦吟し、句を得て眼を開く。忽四老の所在を失す。しらずいづれのところへ仙化し去るや。恍として一人自ず。時に花香風に和し、月光水に浮ぶ。是子が俳諧の郷也。被微笑す。つゝに我社裏に歸して句を吐くこと數千。最麥林支考を非斥す。余曰。麥林支考、其調賤しといへども、工みに人情世態を盡す。さればまゝ支麥の句法に倣ふも、又工案の一助ならざるにあらず。詩家に李杜を貴ぶに論

ところへ仙化し去るや恍として一人自ず
 時を花香風に和し月光水に浮ぶ
 是子能諧る郷に被微笑すつゝに
 我社裏に歸して句を吐くこと數千
 最麥林支考を非斥す余曰麥林支考
 其調賤しといへども工みに人情世態を盡
 さればまゝ支麥の句法に倣ふも又工案の
 一助ならざるにあらず詩家に李杜を
 貴ぶに論するに余曰

なし。猶元白をすてざるが如くせよ。梵曰。叟我なあざむきて野狐禪に引ことなかれ。畫家に吳張を畫魔とす。支麥は則俳魔ならくのみ。ますく支麥を罵て、進て他岐を顧ず。つゐに俳諧の佳境を極む。おしむべし、一旦病にふして起つことあたはず、形容日々にかじけ、湯藥ほどこすべからず。預(豫)め終焉の期をさし、余を招て手を振て曰。恨らくは叟と、もに流行を同じくせざることを。と、言終て涙

を流す。波曰。叟我をさすは、堅狐禪なり。こゝろを畫家に吳張を畫魔とす。支麥は則俳魔ならくのみ。ますく支麥を罵て進て他岐を顧ず。つゐに俳諧の佳境を極む。おしむべし。一旦病にふして起つことあたはず。形容日々にかじけ、湯藥ほどこすべからず。預め終焉の期をさし、余を招て手を振て曰。恨らくは叟と、もに流行を同じくせざることを。と、言終て涙を流す。

泉下に歸るや余うゝいほて曰我儂皆
 西也るが仇は西せしものなりとい夜半
 茗話の冊子の中に記せる文は夜半茗話
 は余うゝ邊の隨筆にうゝあくもゆくの
 人と討論をうゝを雜録するものや
 是るに廿二文を貫すにて此集の序と
 せしといはるゝに故あるべ文を見てはよ
 清韻洒落なるや其をうゝと知てその
 うゝいほるゝをうゝと叫ぶなりとい

ふたる羊に類すべから
ずといふことを、洛下
の夜半亭に於て

六十二翁燕村書

于時安永丁酉

冬十二月七日

序の片を引くる羊に類をへる
をとりつゝとみ洛下る夜半亭に於て
六十二翁燕村書

于時安永丁酉冬十二月七日

春泥發句選

春之部

元且

ことくく申は盡じ花の春
けさ春の氷ともなし水の糟
春たつや靜に鶴の一步より
素袍着た酢賣出こよ花の春

等持院寓居の頃

元日や草の戸越の麥島

元日雪ふる

野一遍雪見ありきぬ雜煮腹

福壽草

ひととはかたき苔やふく壽艸

鏡開

うれしさや養君のかぐみ割
學寮や祖師の鏡のあぶり喰

寶引 羽子板

寶引の味方にまいるおとな哉
羽子板の一筆書や内裏髪

猿曳 年玉

猿引の村へ來たるよ呼子鳥
とし玉や抱ありく子に小人形
年だまやわび寐の菴の枕上

若菜

小わらはの物は買よきわかな哉
ほととぎすわたらぬさきに薺かな
御飛脚の堀河出てなづな哉

野老

ところ掘おのれが髪も結ふる

梅

此日ごろ梅にながるゝ野河哉
宜高き人のにがみや梅花
うめ生て是より瓶の春いくつ
梅白く藪の緑にさす枝哉
梅ぼしの酒しほすゝめ寺の梅

梅折て斜にし見る木曲哉

梅の月源氏の噂女芳(房)達

御室の僧梅花一枝をたまふ

衣裡よりも得たりかしこし梅の珠

梅折ば先夕月のうごく也

醍醐出て二度に囁ひぬ梅二本

二目に葛家は成りぬうめの花

伏見鶴英任口上人の眞跡を恵け

れば

短冊と伏見の梅を一荷かな

梅花美人來れり漸 二 更

咽されぬ梅のあるじや道心者

歸さの梅の片そぎんめの花

柳

さし柳五尺の春を見せにけり

五條まで舟は登りて柳かな

青柳や堤の春のいく所

かたり合いかにもその柳哉

椿

我庭を瓶に憐む椿かな
里の子が拾ひ首する椿かな
落なんを葉にかゝへたる椿かな

黄鳥

鶯につめたき雨のあした哉
うぐひすの聲あはせけり春の奥
鶯の聲は戸にあるあしたかな
うぐひすや銅蓮水を湛ぬる
無人境うぐひす庭を歩きけり

御忌

八郡の空の霞や御忌鐘

土筆 獨活

つくくしほうけては日の影ぼうし
組ばしやかづき上ヶしはうどの線

所思

土筆經木のかゝる河邊哉

東風 餘寒

東風うけて川添ゆくや久しぶり
飲過た禮者のつらへ餘寒哉

いかづちの後にも春のさむさ哉
思ひ出て藥湯たてる餘寒哉
からびたる竹の寒や春いまだ

自悔

四十にも餘る寒さやものゝ悔
底たゝく音や餘寒の炭俵

霞

望汐の遠くも響くかすみ哉
日三竿雨になり行霞かな
波の寄ル小じまも見へて霞哉

海苔 若鮎

生海苔の波打際や東海寺

點々と折敷に見せる小鮎哉
波鮎や青山高く水長し
柴にとる海苔大分も見へぬ也

臘月

おぼろ月癩の飛込水古し
我影や心もとなき臘月
田蘭の趣さらにおぼろ月

土とりのあとの溜りや臘月

轉 春風

轉に獨起出るや泊客
撫あける畫寐の顔や春の風

紙鳶

暮かゝる空をかこつや八巾
里坊に兒やおはしていかのぼり
朝東風に八巾賣店を開きけり
此糊のひるま過せよ紙鳶
八巾買て子心ぞ憂雨つゞき
いかのぼり遠まさり行反古かな

白魚

白魚に餘寒の海やいせ尾張
しらうをゝめづるや老のうん吞に
しら魚やつきまとはるゝ海の塵

蛙

こもり江や雲母うく水に啼蛙
西行の席さはがしき蛙かな
いづちともなくや蛙の在所

はじめから聲からしたる蛙かな
江の蛙生駒の雲のかゝる也

猫戀

木づたひにいとみより來ぬ猫の夫
思ひかね夜べ寐ぬ猫の眠哉
よく見れば乞るゝ妻やこちの猫

歸雁

あたゝかな雨間を雁の呼夜哉
沖に降小雨に入や春の雁
北ぞらや霞て長し雁の道

燕

古き戸に影うつり行燕かな
酒簾につばめ吹るゝ夕かな
幢の佛間へ這入乙鳥哉

蜺

みづうみの淺瀬覺へつ蜺取

和海藻

わかめ刈乙女に袖はなかりけり
春深く和布の塩を拂ひけり

わかめ刈竹枝のそば習けり

落簷

酒いたく吞ておかしや落のとう
晋人の味噌の洒落や落簷
梅生てねじめに折やふきのたう

初午 二日食

初むまや足踏れたる申分ン
鴛の衾に二日やいとかな

涅槃

天人の肘に泪やねはん像

悼北邑幸順

苦き手の其人ゆかし路のとう

木芽 山葵

大原や木の芽すり行牛の頬
麥蕎打テば山葵ありやと夕かな
おもしろうわさびに咽ぶ泪かな

摘草

摘艸やいとはしたなき包もの

蕨 さし木

野の河や蕨さはしてひたしもの
古簪に人をよけたるさし木哉

雀子

すゞめ子や書寫の机のほとり迄
人の手に巢へ戻されつ雀の子
雀子や並び居つゝも黄ナル芻

畑打

瘦脚や畑打休ム日なたぼこ

蝶

地車に起行草の胡蝶哉
はかなしや蝶の羽染る鳥の糞
屋根ふきのあがれば下るこてふ哉

上巳

雛の宴天井に雲盡せん
曲水に病後の僧の苦吟哉
曲水や江家の作者誰くぞ
有常は娘育てゝ家の雛
雛の宴五十の内侍酔れけり
桃花盃疊のうへを流めり

雑店に彷彿として毯てきかな

鶏合

鶏合左右百羽を分ちけり

暹羅かしは桃花の雨のみだれ哉
鶉うさぎのしはがれ聲に名乗けり

桃

劉阮の桃に泊るや撞木町
風呂に見る早き泊りやもゝの花
立よりて萱な荒しそ桃の花

雲雀

庵室や雲雀見し目のまくらやみ
鳥原に田舎の空や夕ひばり

耕

耕に馬持る身のうれしさよ
たがへしやいづこ道ある谷の底
耕や矢背は王氏の孫なりと
十津河や耕人の山刀

田螺 鳥巢

片口のわぶと答へよ田にしあへ

泥澄てそこらに見ゆる田螺哉
鳥の巢や誰か髪もじの一摺
此殿の古巢たづねつ鳥二ツ

花 櫻

舟橋の勅使まうけや花の雲
定りの花見の日あり家の風
侘人の風盡して花ごろも
いで花に君糧包め我は酒
花のため家に醸する主かな
哀れなる瘦地の麥や花の道

巖峨にて

材木の上にあらしや山櫻
むかし道見上て過ぬ山ざくら
北谷は南谷はいま山ざくら
やま櫻うつばに折て歸也
須磨寺のめしのけぶりや山ざくら
晩望
燒火歟と夕日の藪や花に鐘
落る花ひとかたならぬ夕かな

葦ながら雨の日頃や落る花
菴の雨花相似ざるきのふには

御室にて

仁和寺やあしもとよりぞ花の雲
脱かけの袖や花見る舞子ども
ことしまた花見の顔を合せけり
西陣や花に夫婦のにしめもの
いとゞしく花に怠る箒哉
花踏て戻る公卿の艸履かな
その寺の名はわすれたり糸ざくら
さくら狩古き手代や飯奉行
遅櫻驗なる聖住おはす

壬生念佛

山吹やいはでめでたき壬生ねぶつ
御身拭 御影供

乗物で優婆夷も来るや御身拭
北面の御堂かしこし御影供

人丸忌

石見のや月も臘の人丸忌

出代 養父入

出代や人の心のうす月夜
やぶ入の枕うれしき姉姉
養父入や行燈の下の物語

山吹

折ばちる八重山吹の盛かな
山ぶきや雨水ひかぬ地のひくみ

苗代

宵月や苗代水の細き音
里の犬苗しろ水を啜けり
松遠し苗代水に日の當る

春夜

春の夜や足洗はする奈良泊
春の夜もかたぶく月や連歌町

春雨

春雨や野老喰ふて見る女あり
最前に起てもよきを春の雨
文ぬれしことはりいふや春のあめ
迎待つ母よ娘よ春の雨

春の雨あるじは猫でおはす也

春雨や財布ぬらして節句前

春さめや暮を約せし妻戸口

春雨や谷の古葉も流出ッ

春雨の泥や棧敷の楮子まで

はるさめや柳の雪梅の塵

春雨に鐘のうねりや障子越

春水

しづかさや雨の後なる春の水

玄水七十賀

まな鶴をほとりの友や春の水

探題 春燈

春の燈油盛りたる宵の儘

春深く蔀に透るともし哉

蠶

浴して蠶につかふ心かな

月更て桑に音ある蠶かな

雉子

背のひくき木瓜に身を置雉子哉

いで其頃竹拔五郎きじの聲

菜花

菜の花の道行人の岡見哉

なのはなや此邊までは大内裏

菜の花に春行水の光かな

露獨

白雲の根を尋けり岩つゝじ

苔には皺を見せたるつゝじ哉

陽炎

かげろふや燃てはしざる物のひま

陽炎に鬼出てゐる檜原哉

かげろふを掻出す鶏の距けづもかな

陽炎に美しき妻の頭痛かな

遅日

遅日を追分ゆくや馬と駕

枕して遅キ日を行のぼり舟

寒食

寒食や饅に馴たるひとり住

爐寒

爐ふさぎや旅に一人は老の友
物ぐさく爐塞ぐとしも見へぬ也
爐塞て主おかしや力あし
爐ふさぎや招隠の詩を口ずさむ

藤

しら藤や奈良は久しき宮造
白藤や開帳前のひらき道
なつかしき湖水の隅やふちの花
藤棚や小詰役者の草鞋がけ

春暮 晩春

橋守の錢かぞへけり春夕
大原の千句過たり春のくれ
公家町や春物深き金屏風
ゆく春やいづこ流人の迎舟
狩倉の矢來出來たり暮の春
春おしむ人や落花を行戻り
たんぽゝもけふ白頭に暮の春
ほし衣も暮行春の木間かな
行春に流しかけたる筏かな

題 鞍馬

ゆく春のとゞまる所遅ざくら
鴛尾は親子住居て春おしむ
八專の空たのめなくゆく春や
野に山に閑人春を惜みけり

夏之部

郭公

あかつきの一言ぬしやほととぎす
烏帽子にも耳は出るよ時鳥
ほととぎす我も都のうつけ哉
今宮の煤掃しばしほととぎす
貧乏性いたゞく星や蜀魂
うぐひすの箱根や伊豆の子規
ことかたを歩行て訪ふや杜宇

ほととぎす啼やあふみの西東
郭公夜もいろ／＼の物の音

更衣

遣唐のいとま賜ひぬ更衣
更衣ひそかに綿を着します
親殿の御物めかしや更衣
馬場騎の背中ふくるゝ袷哉

うのはな

卯の花や茶俵作る宇治の里
卯の花に貴舟のみこの箒哉
うのはなやかきあげ城の湛水

茨 桐花

道のへの低きにほひや茨の花
逞しき葉のさまうたて桐の花
ぎやう／＼し

佛生會

ぎやう／＼し日高に著て伏見哉
灌佛や雲慶閑に刻けん
灌佛やわらぢも許す堂の椽

閑居島

さびしさの中に聲ありかんこ鳥

日くるればあふ人もなし正木ちる
峯のあらしの音ばかりして

晝日中逢ふ人もなしかんこどり

若葉

あはしまを女の出るわか葉哉
水音も若葉も木曾の日くくに

題橋

虹たるゝもとや橋の木間より

祭

加茂衆の御所に紛るゝ祭かな

牡丹

大坂の牡丹さゝげぬ本願寺
おめかけを牡丹の花の主かな
夜をゝしむ筒のぼたんや枕上
嘗て
御出入の李白を捜すぼたん哉
閑廣し黄なるも交る牡丹哉

夏書

人しらぬ不犯誓ふて夏書かな
似合しき聲おもふ身の夏書哉
夏書さへ晝に成けり妾

麥

覆面の内儀しのばし麥の秋
瘦麥や我身ひとりの小百姓
麥秋や聲殿ことしはじめじやの
十津河や見込の武具も麥埃

題豆查

餘花いまだきのふの酒や豆查汁

短夜

短夜や老しり初る食もたれ
みじか夜をしらで明けり草の雨
短夜の獲を見せうぞ桶の鮎
みじか夜や宿立出て小石原

蝸牛

かたつぶりけさとも同じあり所
夜べの雨馬蘭に殖ぬ蝸牛

青梅

青んめや黄なるも交雨の中

燕子花

かきつばた深く住戸に鳴子哉
鍵の手の寺前の池やかきつばた
小瓶もてみやげにくれし杜若
杜若門から覗く賣屋鋪
女蕨なら舟へと申せ杜若

重五幟競馬 菖蒲

齋に來て幟うらやむ小僧哉
ことし又おと子うみけん幟數
妻哉競馬左右の貌合せ
我牛をめでもやふけるあやめ艸

題竹醉日

此日よと竹移しけり玄關前
杏

醫者どのと酒屋の間の杏かな

早苗 田植

山城へあふみの早苗移けり

白雲や早苗とりさす水の面

早乙女やひとりは見ゆる猫背中
けふも又田植あるやら竹の奥

筍

筍やしづかに見れば草の中
筍や脚の黒子も七十二

水雞

日も暮ぬ人もかへりぬ水雞なく
月の出に川筋白しくゐな鳴

射照

百姓の弓矢古たるともし哉
十五から列卒にさゝるゝ射照哉
一兩を擲つ木香のともしかな
鹿遠しいでや射照の手だれ者

五月雨

さみだれの石に鑿する日數哉
五月雨や晝寐の夢にうつつ山
貌につく瞬のしめりや五月雨

農業

笠に入て燐うちけりさ月雨

螢

雨の夜や猶おもむろに行螢
行螢夜のみかうしまいりけり

夏草 夏野

夏草に狩入犬の見へぬ也
夏野ゆく村商人やひとへもの

夏山

夏の山しづかに鳥の鳴音哉

鮎

我井戸に桂の鮎の雫かな

河骨

水渺く河骨莖をかくしけり

藻花

藻の花やわれても末に舟の跡

若竹

若竹に蠅のはなれぬ甘み哉
わかたけや村百軒の麥の音

麥粉

むせるなと麥の粉くれぬ男の童

梅漬

梅漬にむかしをしのぶ眞壺哉

青田

むら雨の離宮を過る青田哉

百合 蓼

ゆりあまた束ネて涼し伏見舟
経高く摘をく蓼や雨の園

夏木立 木下暗

夏木立いつ遁失て裸城
下闇の三輪も過けり泊瀬の町

谷河の空を閉るや夏こだち

市人の爰見立けり夏木だち

夏木立阿闍梨の供の後ばせ

茄子

人妻のこれを饗應す茄子漬

茄子ありこゝ武藏野ゝ這入口

なすび賣一夏の僧を音信るゝ

蚊 鋸

うき人に蚊の口見せる腕かな

雪隠に信玄おはす蚊やり哉
世やうつりかはらの院の蚊遣かな
翌までと括りよせけり藪の破
燈に書のおぼろや蚊屋の中
待戀

苦しや藪へも入らず蚊屋の傍
植込の蚊に罵れる女かな
物得たり藪のかくれの妹が文
いぶせきや子のあまたある藪の内
淋しさは天井高し寺の藪
蚊の聲の目口を過るうき世哉
蚊やりして武士守りぬ崩れ堀
淺ましや蚊屋に透たる夜のもの
はづかしや朝の藪を覗く人

蠅 毛蟲

詩にあらず錦にあらず機の蠅
あさましく蠅打音や臺所
羽ネもいだ蠅歩行けり誰が所爲
桃原の岸に流るゝけむし哉

夏羽織 帷子

交れば世にむづかしや薄羽織
かたびらや浴して來し人の貌
新尼の着つゝおかしや繪かたびら
昨

鉢壓て我は人待男かな
早鉢に王思は飯をあふぎけり
酒呵る人もや鉢に小盃

鶺鴒

曲り江にものいひかはす鶺鴒ぶね哉
早瀬とは鶺鴒の火に見ゆる遙也
吐す鶺鴒と放つ鶺鴒繩のいとまなみ
夏月

夏の月よき人加茂の歩わたり
涼しさの日枝をのぼるや夏の月
少年の犬走らすや夏の月
ほのめけるはし居の君や夏の月
檀林に談義果しよ夏の月
川狩

河狩や身にそふ陰間かたらひぬ
水更ぬ岸をうちゆく網の音

白雨 雨乞

ゆふだちや市の中ゆくさゝら波
君王のゆふだち響る臺かな
雨乞に夜ひと經よむ僧徒哉

暑

暑日や産婦も見へて半屏風
町あつく振舞水の埃かな

雲峯

假そめの油廣がる雲のみね
良のとに恐し雲の峯
元山のうしろをのぼる雲の峰

題斧

つゝ立て雲峰見る五鬼善鬼
汗拭

團扇

目ざましに水ひてゝ來よ汗拭
うす雲に歌や望まむ白うちは

まらう人へ團まいらせん白き方
前帶の友むつまじき團かな
面頬おもてほをはづして將の扇哉

蟬 夏虫

さまかへて御庭拜むや蟬の聲
蟬鳴や晝寐しばらく旨かつし
啼蟬の岩くらたどる目疾哉
せみの聲茶屋なき唄を通りけり
夏むしや夜學の人の貌をうつ

納涼

涼舟いとし若衆の小鼓は
水練を舟の御遊やゆふ涼
うか／＼と南草みなくさに酔ふや朝涼

簟

浴して且うれしさよたかむしろ
もろこしの夢はさめたり簟

竹婦人

抱籠や誰に倦れて拂もの

虫拂

筆のものの忌日ながらやむし拂
上野や足利代／＼の虫拂

祇園會

かしこくも羯鼓學びぬ鈴の兒
祇園會に曳や手摩てま乳あしなづち

晝顔

晝がほや子を運ぶ馳垣根より

蓮

とく起よ花の君子を訪日なら
麻頭巾蓮見にまかる小舟哉
瓶の蓮としも菴葉ばかり也
何いふて叫く舟ぞ採蓮歌

瓜

先すゝめ東寺はちかき瓜所
瓜刻むあした隣を聞れけり
冷し瓜加茂の流に枕せむ

體

あまざけや盆に居並ぶ父と母

海松 ところてん

汐染ぬ雫うれしや籠のみる

旅人の買はじめけんところてん
心太酒の肴にたうべけれ

夕顔

ゆふがほや古君今の名はしらす
夕貌や用所見て置旅の宿

施米

腰ぬけの僧扶け来る施米哉

麻

なつかしき闇のにほひや麻晶
あさかりてかつぱり淋し門の外

清水

川上は温泉の涌なる清水哉
旅人の藥たてたる清水哉
かけ出の髭を絞りて清水哉

常夏

なでしこや美人手づから灌ぬる

水餅

あひにあふ水をろしやこほり餅

夏 歌

兒つれて法師のしのお御祓哉
白幣のはや西を吹みそぎ哉

春泥發句選

秋之部

白馬寺に如來うつしてけさの秋
今朝の秋を遊びありくや水すまし
荒海に題目見へてけさの秋
秋たつやさらに更行小田の泡
初秋や藥にうつる星の影

六月間ありけるとし

水なしの繼橋越ぬ今朝の秋
豚はるゝ身を起されつけさの秋
水底に青砥が錢やけさのあき

一葉

禪の竿を落けり桐一葉

散柳

古御所の寺になりけり散柳

七夕

七夕やよみ歌聞に梶が茶屋
きぬぐに鵲尻を向々にけり
七夕や藍屋の女肩に糸
あまさかる鄙を川下天河
とかくして夜とはなりけり天の川

魂祭

旗買て方士戻りぬ玉まつり
佗しさや寐所ちかき魂祭

燈籠

行ほどに上京淋し高燈籠
長旅の城下へ出れば灯籠哉
高燈籠寺前の池に移りけり
つと立てあぶら浴たる切籠哉

踊

乙の君ある夜ひそかに躍かな
母式部間よりやみへ踊かな
うかと出て家路に遠き踊哉
かの後家のうしろに踊る狐哉
(此句「太貳句選」にあり)
霜天にみちぐ明るをどり哉

うき人の貌猶深き躍かな

相撲

賭の御馬ひき出すすまひ哉
老にきと妻定めけりすまひ取
弓張に暮行角力柱かな

花火

花火舟遊人去ッて秋の水
花火舟家老ながらも叔父の殿

葬

朝がほや日刺の髭も薄淺黄
ひともの葬や日に出来ふでき
あさがほや盥の前に新也
明暮と朝顔守るいほりかな

露

蛛の巢に露ふりよする管かな
露けしや朝草喰ふた馬の鼻
草高く露も穂に出る夕かな
庭ゆくも露に裾とる女哉
松明に露の白さや夜の道

塵撫て驚たちぬ月の露
狩入て露打拂ふ靱かな
膏藥になる草とはん原の露
むさし野や合羽に震ふ露の玉

萩萩

ほろ／＼と秋風こぼす萩がもと
爰かしこ小家隠して岡のはぎ
似合しき萩のあるじや女宮
明ぬとて萩を分ゆく聖かな
なつかしき萩の葉伸や塀の上
一本の萩にも秋のそよぐ音

薄

山犬のがばと起ゆくすゝき哉
身がまへて芒かる也下男

苦菴

鬼灯や老ても妓女の愚かしき

木槿

白木槿夏華も末の一二りん

秋風

物換る壁の夕日やあきの風

子の貌に秋かぜ白し天瓜粉
秋風や蚊屋に刀の鎮置ん

秋扇

秋かぜの閨に残せし要哉

蜻蛉

とんぼうや飯の先までひたと来る
白壁に蜻蛉過る日影哉

秋蚊

秋の蚊や黙／＼として喰ひ行

鱸

かゝる日に貰ひ鱸や生腐り

八朔

八朔や四座の登城の袖かへす

稻妻

いなづまや雨月の夫婦まだ寐す
稻づまにあやしき舟の訴哉
いなづまや其はゝ木ゝの梢まで
稻妻や夜もをり／＼の横渉し

霧 秋雲

霧雨の外面にうごく曇哉
石火矢に出行船や霧のひま
山霧の梢に透る朝日かな
入相や霧になり行一ッづゝ
霧立て遠里小野となりにけり
二色の繪具に足るや秋の雲

稻 落穂

稻の香やゆりもて運ぶ行違
めでたさよ稻穂落ちる路の傍
稻ぶさや誰むすび置宮柱
何かせん稻刈頃のかゝり人
あしあとのそこら數ある落穂哉

鳴子 引板

野ねづみの逃るも見ゆる鳴子哉
水盡て引とる息や引板の音

秋暮 秋旅

加茂の町樂も聞えず秋の暮
婚禮の家を出ればあきの暮

寺子屋のてら子去ニけり秋暮
短冊の屏風を見たり秋のくれ
しられじと旅の身に添ふ金氣哉

月

名月や此松陰の硯水
唐柜に駒や繋ん野路の月
名月や懷紙拾ひし夜の道
名月に辻の地藏のともし哉
百貫の坊に客ありけふの月
橋の月裸乞食の念佛かな

東寺寓居にて

山ぶきは社家町に似てけふの月
名月や厠にて詩の案じぐせ
名月や瓶子奪合ふ上達部
夕月や驢鞍過ゆく驢鞍橋
月影や田をうちこちの水の音
見るものにしてや月見の小百姓
名月や金拾はんとたち出る
月かけて碧築くや兵等

湖を月見の旅や友二人
ありときく兼栽松や月の前
後の月何か着に湯氣のもの

悼移竹堂

硯箱ふたよの月を見納めぬ

同十三回忌

乙御前や顔見ぬばかり月の前

放生會

曉の霧しづかに神の下山哉
浪黒き鰻十荷や放生會
山崎へあまれる鳩や放生會

秋夜

秋の夜をあはれ田守の鼓かな
秋の夜に江帥兵を談じけり
如ものに秋の夜を守焼火哉
長き夜の寐覺語るや父と母
永夜にやゝ讀盡ぬ若菜の下

題妓

秋の夜を何かしろ女が丸行燈

長き夜やあらし成ぬ翌の業

案山子

夕日影道まで出るかゞし哉
立されば形チなしたる鹿駱哉
をちこちのたづきなき身のかゞし哉
編笠のとにわびしき案山子哉
二ッあるかゞし容を違へけり

題俵

腰を折五斗の脱のかゞし哉
朝風に弓返りしたる案山子哉

冬瓜 糸瓜

よきものと冬瓜勧るくすし哉
汁菜にならでうき世をへちま哉

江鮭 下築

あめ来るや普請半の川堤
(又) またしては狐見舞ぬくたり築

蕎麥花 穂蓼

そばの花晶の秋も後段哉
花を見て蓼の多さよ此邊

草花 野菊 蘿

あつめねば花にもあらぬ小草哉
折よりは行に慰む花野哉
かたはらにかぼちや花咲野菊哉
藪壘半は薦のもみちけり
代なしに譲らんといいふ蘿の宿

野分

(一息)

まひといき野分吹らん薄月夜
子狐を穴へ呼込のはき哉
雪隠のかきがねはず野分かな
獨居の野分ながらに朝寐哉
宿までは闇の野分や馬の上

秋水

白髭の笠木も見へて秋の水

荻葉村先生之讀州

江一山の助況や秋添て

葛 蘭

くすの葉も吹や鳴子のうら表
栗に飽て蘭につく鼠とらへけり

柿

秋されや柿さまぐの物のしな

蕃椒 南棗

年よりの唇いやしとうがらし
蕃椒常世が鉢にちぎりけり
た葉ことりて荒に就たる昌哉
南草干すとしても縄の中だるみ

鶏頭花 葡萄

けいとうの宿や窓から答へけり
ぶどうめす水銀盤をうたれけり

虫 蟋蟀

乾きたる虫籠の草やあら無沙汰
虫聞てたつや野人の怪しむまで
虫籠の總角さめぬ致仕の君
秋風に涕すゝりけりきりくす

九日

人心しづかに菊の節句かな

菊

宿のきく陶にさして憐まん

櫻井が跡に宗長菊持参

すがりかと思はるゝ菊の開きけり

菊の香や花賣が身の袂にも

初ぎくや九日までの宵月夜

土龍妹が黄菊は荒にけり

うたゝねの顔に離騒や菊の花

雞老ぬ茄子黄みぬきく昌

とく遅く菊此頃のたのしさよ

草の戸の酢徳利ふるや菊膽

殘菊

見る時は殘菊としもなかりけり

菊の香や十日の朝のめしの前

栗

料足に栗まいらする忌日哉

落栗や墓に經よむ僧の前

いがぐりに鼠のしのお妻戸哉

題 老坂

毬栗に踏あやまちそ老の坂

蜜柑

埋み置灰に音を鳴くみかん哉

掃衣

いねがしの男うれたき砧かな

小どもしの油あやまつきぬた哉

相住や砧に向ふ比丘比丘尼

山うばと貌見あはしてきぬた哉

牛祭

油斷して京へ連なし牛まつり

新米

船頭に乞とるめしやことし米

撓米や其家くのいせの神

新酒

父が酔家の新酒のうれしさに

買ほどは盡さぬ旅の新酒哉

新酒や天窓叩てまいる人

つけさしの穗に出る君やことし酒

母衣かけて新酒に酔る祭哉

初紅葉 照葉

いづちよりいづち使ぞ初もみち

切溜につふと見せたる照葉哉

銀杏

北は黄にいてふぞ見ゆる大徳寺

秋雨

秋雨や四方縁にも濡るゝ方

揚屋から旅乗物や秋の雨

秋雨や旅に行あふ芝居もの

芭蕉 新綿

蓑の背にばせをの雨の雪哉

何となき綿のにほひや宿通

鶉

うづら籠棚の鼓に並びけり

夜寒

明ばまた夜寒の雨戸縹はん

ふさとめす地藏の綿も夜寒哉

怪談の後つち更行夜寒哉

月の洩穴も夜寒のひとつ哉

あとさして夜寒に慮外申ばや

題 妖もの

炭とりは早足のつく夜寒哉

鹿

鹿寒く月輪どのゝ寐覺哉
鳴川の戸に寄鹿や下駄の音
ぬれ色に起行鹿や草の雨
賓主鹿聞ぬ夜をかこちぬる
身は瘦て草嚙む鹿の思かな

小鳥 鷓鴣

川上や黄昏かゝる小鳥あみ
遁とぶ鷓鴣一群や森の月
鬼貫も歌よみにけり鷓鴣とし
鷓鴣くや黍より低き小松原

氣瓜

種瓢斑なつらを見はやさん
いつしかにうとろなものよ種瓢

木犀

木犀や禪をいふなる僧と我

雁

大宮や南がしらに雁の聲

初雁や目に相手なき海の月
はつ雁も春の覺への舟路哉
低く飛雁あり扱は水近し

探題 鍛冶

月一山の梢に響く秋の聲

茸

唐櫃の北山戻るきのこかな
さし上て獲見せけり菌狩
降出して茸狩残す遺恨哉
茸山や鼓鐵砲の一けぶり

紅葉

紅葉見や小雨つれなき村はづれ
山づとの紅葉投げり上り口
吹さます酒や紅葉の焼過し

老母野 梅簾

花の時は氣づかさりしが老母草の實
梅もとき我あり顔や暮の秋

暮秋

長き藻も秋行筋や水の底

枯てたつ草のはつかやくれの秋
四町なる御歌使や昏の秋

題 關

月影の不破にも洩らず九月盡
禪に贈(送カ)別の詩や九月盡
石女と暮ゆく秋を惜しみけり

冬之部

初冬や兵庫の魚荷何くぞ
はつ冬や戸さし寄たる芳野殿
初ふゆは疊とのみぞ障子越
はつ冬や空へ吹るゝ蜘蛛のいと

時雨

しぐれする音聞初る山路かな
傘の上は月夜のしぐれ哉
三度まで時雨ていとは黒木馬

生て世に寐覺うれしき時雨哉
夕しぐれ古江に沈む木の實哉
雲母行豆腐にかゝるしぐれ哉
江戸住やしぐれ間こす人ゆかし
衰やしぐれ待身となりにける
喘息に寐つかぬ聲や小夜時雨
山城のとはかは急ぐ時雨かな
妻木とる内侍の尼のしぐれ哉
むらしぐれ古市の里にしばしとて
寺深く竹伐音や夕時雨

爐開

爐びらきやけふも灯下に老の日記
爐開や庭はあらしの縦を吹

芭蕉忌

冬の雨しぐれのあとを繼夜哉

風雪群忌

其集に洩せし十夜袋かな

十夜

人聲の小寺にあまる十夜かな

燒寺の早くも建て十夜哉

口切

口切や寺へ呼れて竹の奥
口切や彈正といふ人のさま

夷講 達磨忌

前髪に懸はありけり夷講
蛭子講火鉢うれしとこぞりぬる
達磨忌や和尚いづちを尻目なる

茶花

茶の花にきゝす鳴也谷の坊
茶のはなに文覺のやうな庵主哉

歸花

かへり花蛭のもぬけに薰す
はゝ木ゝの梢はこゝぞ歸花
雨雲の梢は奇也かへり花
咲出て心ならずや歸ばな
歸花桃李の美人覺束な

草枯

いさゝかな草も枯けり石の間

霜

日三竿檜原に耐ぬ霜の色
羊煮て兵を勞ふ霜夜哉
手してうつ鐘は石也寺の霜
織殿の霜夜も更ぬ女聲

落葉

あちこちとして居りたる落葉哉
窺深にも射たる塚の落葉哉
寺ゆかし山路の落葉しめりけり
水含む落葉わび行草履かな
宮つこの間の顔うつ落葉哉

大根

冬偈ある寺にひかるゝ大根かな
胡蘿も色こきまぜて大根曳

納豆汁

納豆汁比丘尼は比丘に劣りけり
反碗は家にふりたり納豆汁
壺といふ隣の音や納とう汁
齋腹の便ゝたりや納豆汁

海鼠

麗しく玉堂佳器にこたゝみぬ
憂を海月に語る海鼠哉
海鼠たゝみの癡應しのばし聚樂御所

蝸

煎蝸に土器とりし采女かな

冬至 御火焼

雨ながら朔旦冬至たゞならね
よそながら冬至と聞や草の庵
天文の博士ほのめく冬至かな
百姓に浴ほどこす冬至哉
禪院の子も菓子貰ふ冬至哉
御火焼や積上し傍へ先よるな

枇杷花

輪番にさびしき僧やびはの花
木枯

こがらしや瀧吹わけて岩の肩
風や花子の宿の戸にさはる
木がらしの夜にゆたふる菴哉

貌見世

顔見せや伏見くらまの夜の旅

浪花

顔みせや空灶ものゝ舟一片

寒

鐘水

さす敵に矢をとり落す寒かな
本陣に鼠の糞のさむさ哉
鐘水尾上の寺や月孤ッ

氷

初氷許由此朝掬すれは
うすら氷や格子の透の器
琥珀には蟻氷には紅葉哉

水鳥

鴨 鶺鴒

水鳥やかねて郷士の掣撰び
水とりや心の闇の流し鵜
浮鳥を石とあやまる水遠し
毛を立て驚く鴨の眠かな
水鳥に唐輪の兒の餌蒔哉
鴨の毛や箠打たゝく軒の水

かたよりて鳥根の鶺鴒の夕かな

千鳥

江南は鳥飛也むら千鳥

雪 寒

初雪に人寒からぬ御宴かな
客去て寺しづか也夜の雪
何を釣沖の小舟ぞ笠の雪
羽織着て門の雪掃女房哉
雪の日や笠着た人をみさぶらひ
袖を出る香爐も雪の衛哉
ぬけがけの手綱ひかゆる雪吹哉
物焚て夜すがら雪の乞食哉
山買ふて我雪多きあるじ哉
都邊や坂に足駄の雪月夜
雪の日や隣家の童子欠木履
村人に雪の見所習らひけり
よき君の雪の礫に預らん
夜着を着て障子明たりけさの雪
初雪や既に薄暮の風より

雪の朝童子茶臼を敲く也
寒して海老吹寄る汀かな

遠忌

その夜半の啼音は遠し浦衛

仙鶴退善

弔へば今もきませる頭巾哉

冬枯

冬がれの里を見おろす峠かな
家遠し枯木のもとの夕けぶり

冬野

枯野していづこゝの道の數
伯樂が鍼に血を見る冬野哉
生て世に古錢掘出す冬野哉
枯野して松二もとやむかし道
上京の湯どのに續く枯野哉
枯野のや簀若し人に日の當る
關屋より道のさだまる枯野哉

鷹

あたゝめよ瓶子ながらの酒の君

冷めしの霰たばしる鷹野哉
鳥叫や鷹にあたへる肉一鬚
草の戸に茶ひとつ乞り狩の君

炭

炭うりや京に七ツの這入口
うき人の顔にもかゝればしり炭
消炭に薄雪かゝる垣根かな
炭を掘下部ゆがまぬ心かな
炭取に侘しき箸の火ばし哉

椿

椿の火にあやしき僧の山居哉
椿けぶる住居侘しや墨なき

埋火

うづみ火に我夜計るや枕上
おのゝの埋火抱て繾綣かな

冬籠

冬ごもり五車の反古の主哉
仁齋の巨燧に袴冬ごもり
思ふ事戸に書れたり冬籠

住つかぬ歌舞妓役者や冬籠
雉子一羽諸生二人の冬ごもり

隔なき友とさし向ひおろゝの
みたるいとおかし

何なりと薄鍋かけん冬座敷

水仙

水仙や室町殿の五間床
水仙や藥の御園守あたり
すいせんや先揚屋から生けそむる
水仙や引さき紙に珍重す

寒菊

寒菊や猶なつかしき光悦寺
寒菊やわきてかしこき苦がち
寒ぎくや四ッまで園の日のあたる

冬椿

冬つばき難波の梅の時分哉

冬木立

郊外に酒屋の蔵や冬木だち
孟子讀郷士の窓や冬木立

帯見ゆる貧乏柿や冬こだち
垣結へる御修理の橋や冬木立

綿帽子 綿子

里下りの野ひとつ越えや綿ばうし
留主がちの夜を守妻の綿子哉
綿帽子士農工商の妻の體

紙子

小夜更て紙子まいらす迎かな
弓の師の家中をありく紙子哉
ながらへば紙子を貰ふすまひ哉
紙衣着てふくれありくや後影
紙子きて嫁が手利をほゝゑみぬ

足袋 紙

扱あかき娘の足袋や都どり
あさましや足袋に足袋はく虚勞病
子の母よく度結ぶ足袋の紐
革足袋で村あるかるゝ醫師哉
競べあふ紙の手先や寮の尼

頭巾

風に頭巾忘れてうき身哉
頭巾さへ多田の新發意の左折
酒臭やうかれ頭巾の行違ひ
異見など投頭巾着て馬の耳
頭巾着て法師か知らじ安良殿
頭巾深しとても聞えぬ老の耳
楊虎ぞと取違たるづきん哉
學して寐ずや頭巾の影ばうし
袂なる頭巾さがすや物わすれ
頭巾着し治郎に逢りうつ山の
引かふて棧敷に忍ぶづきん哉

火桶

光茂が膠兀たる火桶哉
火桶はる曆わびしき月日かな
山伏も舞子も住て火桶哉
炭をふく紀の關守が火桶かな

蒲團

身に添はで憂しやふとんの透間風
輕井澤君がきませるふとん哉

紡績に妻老けるよ敷ぶとん
旅の夜の我癒る 蒲團 哉

火燵

巨燵してくれる驛の馴染哉
山鳥の病妻へだつ巨燵哉
侘しさや巨燵に焦る蜘蛛の糸

圍爐裡

大原女の足投出していろり哉

冬月

しづかなる柿の木ばらや冬の月
質置のイむ門や冬の月
寒月や穢多が虎竹に肉の影
溫石の百兩握るふゆの月

寒上燈

氈帳に短檠くらし藥喰

河豚

鮓あらふいつもの男まいりたり
ふくと汁我が使に我ぞ來ぬ
歸らめや鰻喰ぬ家によせし身を

河豚汁鯛は凡にてまし／＼ける
河豚しらす四十九年のひがとよ
廻文の點の長さよふぐと汁
佐殿に文覺鯨を進めけり

雞卵酒

王子酒 賓主を分ッ小盃
沫を消す内儀老たり王子酒
草の戸や盃足らぬ鶏卵酒
寐酒せん先たのもしき鶏卵百
王子酒十重ねたる小さかつき

煮凍 藥喰

煮凍を旦夕やひとり住
煮凍にともに箸さす女夫かな
長言す人去れけり藥喰
タベ誰疊焦しつくすり喰

葱 莖菜

小灯に葱洗ふ川や夜半の月
僕等のよゝと盛りけねぶか汁
重箱に縮て贈る莖菜哉

後妻のと／＼に問ふ莖菜哉
莖をしに寺中をめぐる老女哉

鯨 鯛

鯨 舟新島守を慰めつ
一のもり突や日來の飯の恩
めでたしな御子達からの臺の鯨

寒造 御佛名

碓の十挺だてや寒づくり
佛名や柿の衣の僧ばかり

鉢 敲

鉢たゝき頭巾まくれて髻の霜
愚なる御僧と申せ鉢叩
鉢たゝき右京左京の行戻

寒念佛 寒垢離

無縁寺の夜は明にけり寒ねぶつ
茶を申をうなの聲や寒念佛
寒垢離の風に乘行歩み哉

病中陰

鏡とらば兩の鬢や枯尾花

煤 拂

門口に歩みの板や煤拂
煤拂あやしの頭巾着たりけり
平仲が貌ともはやせ煤拂
一兩の皿あやまつやす／＼拂
す／＼掃や宵のさむしろ大書院
煤掃やいつから見えぬ物のふた
きぬ／＼の駕も過けり煤拂
何やらん妻火ともして翌の煤

年 忘

家中衆のしのび／＼や年忘
王子吸ふ女も見えつ年忘
官方の武士うつくしや年忘
國衆は舞子が好でとし忘
貝で吞ム人をあふぐや年忘
腰越や鎌倉は嘸年わすれ
醉臥の妹なつかしや年忘
燭まして夜を續にけり年忘

寒 聲

寒聲や京に住居の能太夫

衣配 餅搗

橋のむかし文庫やきぬくばり
百疋は握る使や衣くばり
餅つきや焚火のうつる嫁の貌

節季候 掛乞

恥しらぬ老の戯れや節季候
掛乞や雪ふみわけて妹が許
書出しに小町が返事なかりけり

年木樵 岡見

うれしさよ御寺へ年木まいらせて
此村に長生多き岡見哉

追儼 節分

追儼うらの町にも聞えけり
先生も人のすゝめや厄おとし
厄落し石女年をあかしけり
節分やよい巫女懸る神樂堂
寶舟御枕香ぞいや高き
やごとなき一筆がきや寶舟

節分をともし立たり獨住

年内立春

宵闇に春ぞ立ゐる十日ほど

年ごもり

月もなき杉の嵐や年籠

歳暮

行としや月日の鼠どこへやら
春正があつらへ來しぬ年暮
口上のせいば使や古男
年のいそぎ聖の衣みじかしや
馬の背にまたるゝ銀やとしのくれ
行としやたゞならぬ身の妹分
錢はさむ下部の腰や年暮
ゆくとしや六波羅禿おぼつか
常よりも遊ぶ日多しとしの暮
年の市や馬士にのみやる送り狀
名の高き茶人も見けり年のくれ
竈塗の心しづかにとしの暮

[illegible]